

2024年6月23日 礼拝説教要旨

ハイデルベルク信仰問答講解説教Ⅱ50「神を信頼する祈り」

エレミヤ17：5～8、マタイ6：27～30

問125第四の願いは何ですか。

答 「われらの日用の糧をきょうも与えたまえ」です。すなわち、わたしたちに肉体的に必要なすべてのものを備えてください、それによって、わたしたちが、あなたこそ良きものすべての唯一の源であられること、また、あなたの祝福なしには、わたしたちの心配りや労働、あなたの賜物でさえも、わたしたちの益にならないことを知り、そうしてわたしたちが、自分の信頼をあらゆる被造物から取り去り、ただあなたの上のみ置くようにさせてください、ということです。

人間が生きるために食事は欠かせません。また身体の健やかさは食事によって保たれます。お医者さんがよく言うのは、朝昼晩、バランスの良い食事に心がけること。このバランスが崩れると調子が悪くなります。「暴飲暴食」あるいは「偏食」と言います。食べることは生きるために大事ですが、同時に食べることで身体を壊すこともある。わたしたちは体験的にそのことを知っています。

今日の信仰問答で「あなたの祝福なしには、わたしたちの心配りや労働、あなたの賜物でさえも、わたしたちの益にならない」とありました。わたしたちが生きるために必要な毎日の食事です。でもその食事さえも神さまの祝福がなければそれはわたしたちの益にはならない。むしろ身体を壊すものになってしまう。それだけではない。「心配りや労働」とあります。日々の糧を得るためには働かなくてはなりませんし、働くことに心配や気苦労はつきものです。また「賜物」とは、持って生まれた才能やその人の気質なども含まれるでしょう。そういうものもすべて神さまの祝福がなければ空しいということです。その人がどんなに優れた才能を持っていたとしても、どんなに苦労して働いて富を築いたとしても、それで良い家に住み、毎日豊かな糧を得ていたとしても、神さまの祝福がなければ、それは益にはならない。それどころか、むしろすべては空しくなっていくのです。これは恐ろしいことではないでしょうか。

わたしたちの問題は、すべてのものの中に神さまの祝福を見られなくなっていることです。つまり神さま抜きに、人間だけですべては完結していくのです。そこにわたしたちの空しさの原因があります。それは言葉を換えて言えば、喜びがなくなるということです。食べることの喜び、働くことの喜び、総じて言えば生きることの喜びです。日々の生活を楽しんだり、そこに幸いを感じるができなくなる。例えば、お腹が空いたから食べる、生命を維持するために食べる食事になる。そうなる究極的にはサプリメントでよいということになるでしょう。必要な栄養素を摂取できればよいということになります。あるいは、生活のために仕方なく働くようになる。喜びも使命感もなく働く。それは空しいと言わざるを得ません。でもどうでしょうか。わたしたちの日々の食事も、労働も、ともするとそういう喜びのない、味気ないものになってしまっているのではないのでしょうか。

聖書の物語を思い起こしましょう。アダムとエバの話でも、神さまは樂園に食べるのに良いものをもたらす木を生えさせ「園のすべての木から取って食べなさい」（創世記2：16）と言われました。また出エジプトの際には、マナを与えて養われます。エリヤには「起きて食べよ」（列王記上19：5）と食べ物を与え励まします。五千人の共食の話も「あなたがたが彼らに

食べ物を与えなさい」(マルコ6:37)と言われ五つのパンと二匹の魚で飢えた人々を養われます。どれもそれは食事という何気無い普段の出来事の中にも神さまの養い、祝福が豊かに注がれていることを示す物語です。

しかし人間はそこに神さまの祝福が見られなくなるのです。興味深いのは、人間が罪を犯すのも、またそれは食べることにあってであったということです。神さまとの約束を破って、食べるはならない木の実を食べてしまった。悪魔が「それを食べると、目が開け、神のように善悪を知るものとなる」(創世記3:5)と誘惑します。それに負けてアダムもエバも木の実を食べてしまいました。その食事は益にならなかった。祝福のない食事となりました。それは祝福を見失い、日々の糧をくださる神さまを信頼することができなくなった人間の罪の姿です。

そして実際、わたしたちはそういう祝福されない食事を摂り続けているのではないのでしょうか。飢えている国があると思えば、フードロスで食べ物を捨てる国もあります。年間に600万トンの食品が廃棄されています。必要以上に、際限なく食べ続けることで人々は健康を害しています。経済の歪みも、格差も、環境破壊も、そこにすべての根があるように思えてなりません。現代社会の際限なく求める生き方、利便性を追求する生き方を一旦立ち止まり見直していかなければならない。そこに祝福はいただけないのです。

だからこそ、このようなわたしたちをもう一度、神さまの祝福のもとに取り戻すために、神さまは愛する独り子イエスさまをくださいました。イエスさまは言われました。「わたしが命のパンである。わたしのもとに来る者は決して飢えることがなく、わたしを信じる者は決して渴くことがない」(ヨハネ6:35) イエスさまが自らを十字架で献げて、その命をもって、わたしたちを罪から救い出してくださいました。そして、もう一度、わたしたちが神さまの祝福のもとに生きることができるようにしてくださいました。

この神さまの祝福のもとに回復され、命の養いを受けている者は、もはや必要以上、際限なく求める生き方から自由にされました。日々の糧、今の生活を感謝して喜んで受け入れることができるようになるのです。普段の何気無い食卓も変わらずに神さまの祝福が注がれている。わたしたちの気苦勞も、日々の仕事も、そこには神さまの祝福が注がれている。だから喜びをもっていただくのです。わたしたちはすでにそういう新しい生き方を始めています。「信心は、満ち足りることを知る者には、大きな利得の道です。なぜならば、わたしたちは、何も持たずに世に生まれ、世を去るときは何も持って行くことができないからです。食べる物と着る物があれば、わたしたちはそれで満足すべきです」(1テモテ6:6~7)と教えられます。神さまが今日もわたしたちを祝福してすべての必要を満たしてくださいませる幸いを覚えましょう。

天の父よ。日々、あなたがわたしたちの必要を満たしてくださいませる幸いを覚えます。何よりイエスさまによって、わたしたちを祝福で満たしてくださいました。それゆえにどうぞすべてに感謝して、喜びをもって生きることができるよう。その日々の小さな食事の中にも、神さまの祝福が注がれていることを信じさせてください。主の御名によって祈ります。アーメン。